

今の大瀬戸黄金道路と昔の相似山道

大瀬戸白櫻

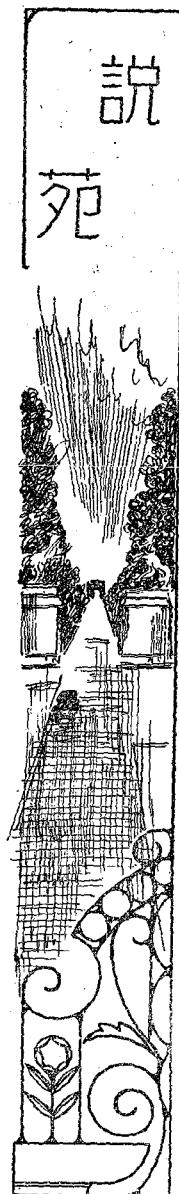
殊に鶴筑子の險の如きは、古來名高い難所と謂はれた場所であるから、改修は難工事中の難所として幾多の人命をも犠牲にし、漸く成功したものである。

北海道十勝國南方海岸廣尾町から留邊志別を経て、日高國幌泉郡北東方海岸猿留^{カヨル}に至る約六里の改修瀬戸海道路を、俗に黃金道路と呼んでゐる。(しかし記者は寧ろ廣尾——浦河間の自動車道路を黃金道路と呼びたい。)

此の道路は、昭和二年以來六十餘萬圓の巨費と八箇年の歲月を費やし、昭和九年の夏季に至り漸く其の工を竣つたが、留邊志別^{ヒタチマツケ}、鶴田貫^{カツタク}間約三里の間は、絶壁の海岸相連り

處である、

には奇巖怪石の間を過ぐるなど、自動車ドライブの爽快味は、之を體験したものでなければ、到底想像だも及ばない



記者は昨夏八月快晴の某日、早朝に阿寒國立公園の湖畔を出發し、自動車を飛ばせて足寄・池田・帶廣を經て廣尾に到り、午餐後同港を視察して後ち、再び自動車を黃金道路に飛ばせ、猿留より山道に入り、襟裳山系を横断して幌泉に出で、更に様似を過ぎ、夕刻浦河町に到着したが、此日の行程は實に百餘里を突破したのであつた、是れ全く交通機関の發達と道路改良の賜ものであると云はねばならない。

記者は今より約三十餘年前、北海道在勤中に屢々各地の行軍に従つたものだが、其の當時の北海道道路の悪かつたことは、形容し難い程であつた。之を近年の改良道路に比較すると、眞に隔世の感がある。之と同時に文化の餘澤を深く厚く感謝せざるを得ない。

而して一たび思素を寛政文化の昔に遡らせると、其當時の旅行客が嘗め盡くした辛苦が如何に深刻であつた乎を想ひ遣られる。

一、昔の様似山道

昔時、東蝦夷地東海岸の難所は、様似山道を推して第一と爲されたものであつた、其の様似山道と云ふのは、日高國の様似と十勝國の廣尾間二十餘里の總稱である。

右山道の中で、様似の冬島・幌泉の豊似・廣尾の鞆筑子を三大難所と呼び、行人の艱難辛苦は言語の外であつた。

是に於て幕府は、寛政十年先づ鞆筑子の難所を避け、ペル留邊志別と鑑田貫間に山道を開き、翌年より更に猿留と幌泉との間に豊似山脈を横断したる新道を開いた。又文化年間に至り、冬島の岩負鼻の難所を避けるため、冬島と幌尾一浦河間は自動車を疾走するに足る所謂黃金道路を見るに至つたことは、交通の爲に慶賀に堪へない。

(一) 留邊志別より鑑田貫に至る間

留邊志別の南一里の海岸に、鞆筑子と云ふ難所があつて、旅人の往來を惱ました所だ。此の難所を避けしめるため、寛政十年(今より百三十八年前)に、幕吏近藤重藏守重は

夷人を役して、留邊志別と鐵田貫との間凡三里の新道を開いた。新道路は、ルベシベ川の渓谷を廻りて、コイカクシユ・ビタヌンケブの渓谷に出で、其の河口に下るのであるが、恐らく蝦夷島に於ける新道開鑿の最先頭であつたであらう。

新道開通前、鞆筑子の海岸を通行した者が、如何に危険を踏み辛苦を嘗めたであらう乎、今其の當時の記録中より其の實況を摘錄して見よう。

近藤守重の巡夷錄に曰ふ、

六月二日、アブタ出立、シラオイ・サル・ミツイシ・ウラカワ・シヤマニを經てホロイヅミに至る。エリモといふは、海中へ凡三里許も突出したる出崎にて、廻船は箱館・惠山より此エリモを見て乗り、東蝦夷の風土も、此の岬の前後にて一變すといふ。シヤマニよりホロイヅミ・ビラウの間嶮尤多く、嵯峨巖絶壁突兀として、馬足通せず、其間チクシキルイ・トモチクシ等の嶮、蟻附蟹歩、はじめて魚腹を免かれ、石頭岩牙を躍歩し、飛泉を登り、水中をゆきて、漸くビラウへ出たり。

寛政十一年赤山紀行（當時の畫家）に曰ふ、

明和安永の頃より、魯人南下の勢ひ止まず、寛政年間既に千島の擇捉に十字架の木標を立て千島蠶食の蹟歴然であるのに、松前藩は小藩にて之を制禦するの力が無いと見た幕府は、國家の一大事と爲し、寛政十年、目付渡邊久藏、

トモツクシと云に至れば、山崩れて大岩海岸に折重る、其岩角を傳り二十町餘行けば、岩山の海中へ出たるあり、岩下深潭にして、打寄る浪岩の半に至る、岩の角に手足を懸て、恐る／＼攀通る、其間に少し岩の入込んだ所にて暫く休み、又十五六間も前の如くにして越しける、石質御影石の如く、浪苦生ず、後を顧れば深淵にて波濤高く、目眩て魂消る計也、是迄の道中、艱難ヲコシキリ・テレケウチ・念佛坂・トモチクシ數所あれども、此の艱難には及ぶべくもの無かりし。

安政年間松浦北海（武四郎）の東蝦夷日誌に曰ふ、

山道の未開時、此處よりしてビタヌンケヘ海岸を通りしがポントモチラシと云ひ、惣て崩落る岩の上を飛越剝越行く、名義は「昔時此處を通りし旅人度々落て死せし故名づけし」と、（中略）寛政前は、此邊に山道なく、今搔送りに往來の處を樹根岩角を攀て越渡りしが、此危險を脱る様になりしは、近藤最上の大功、等の及ぶ所にあらず。

使番大河内善兵衛（政壽）・勘定吟味役三橋藤左衛門（成方）等に、東蝦夷地の巡察を命じた、渡邊は松前に在て事を執り、大河内は様似迄、三橋は宗谷迄を巡見し、此年冬江戸に歸り、閻老に報告する所あつた。

又蝦夷警衛掛である勘定奉行石川左近將監忠房は、勘定吟味役近藤重藏（守重）に東蝦夷地及擇捉島の巡視を命じた。寛政十年近藤重藏は箱館に渡り、陸行して蚊田・白老・砂流・新冠・浦河・様似・幌泉・廣尾を經て十勝の海岸を進み、釧路厚岸根室に出で、遂に國後に渡つた。

此の旅行に於て始めて襟裳岬附近の海岸を通過し、途上各所にある難所を跋涉したが、就中トモチラシの嶮所を過ぎ、往來人の艱苦危険を想ひ、之を救はんため新道開鑿の決意を爲したので、歸路廣尾に到達した時、偶ま風濤激しく海岸の通行止り、數日間の滞留を餘儀なくさせられたので、大に發憤し通辭及土人の主なる者と協議の上、愈々新道開鑿に着手するに決し、從者下野源助（本名木村謙次）等をして工事を監督させ、留邊志別と鰐田貫間の山道を開

いたのである。是れ蝦夷地に於ける道路開鑿の嚆矢であつた。

近藤重藏は新道開通の事蹟を後世に遺さんため、其の顛末を漢文に綴り、之を木板に刻して廣尾の十勝明神祠に奉納した、今尚ほ十勝神社に保存し寶物としてゐる、依て其の全文を譯して左に掲げる。

蝦夷東北の徼、射驥兒^{シャマニ}より尾朗^{ヒロワ}に至る、海岸の險を涉るに、鞠筑子^{クルマニ}體内の苦きは、巉巖絕壁、登降趨趣、蟹歩蠅躍、蟻附猿攀、誤て一步を失すれば、則ち齧粉にあらざれば、必らず魚腹、夷族此の險に死するもの間々亦之れあり。江戸輪軒使近藤君、一たび此の險を經て、新に道を山後に開くに意あり、惠土呂府安歸^{エトロフ}の日、風雨阻み、道路塞る、濡滞すること數日是に於て慨然として憤を發し、允詞某及夷族と商議し、資を出し財を散じ、留邊志別より、水を遡て神菱留に至る、針を按し南に流に沿ふて下り、鰐田奴月に出で、登降凡三里にして近し、木を伐り流に架して橋と爲し、石を碎て谷に投して梯と爲す、行路初て免る、跋涉するも危なし、人夷之に賴るはれ江戸の餘澤を夷族に波及する所以なり、而して近藤君の人を思ひ夷を思ふの陰徳と爲す也、余其の事に與る、姓名を

刀勝神祠に記す、大日本寛政十年戊午十一月朔庚申、江戸輪軸使近藤重藏從者下野源助錄す、金平の通辭豊吉、孫吉、夷

族六十八人、
文金平とあるは、場所請負人福島屋の商號である、又
今の大廣尾のことを尾朗の二字を當て用ひたものと思はる、又
されど翌年即ち寛政十一年にビロウの發音難ならずと云ふ
ので、『十勝會所』と改め、十勝一帶の漁場を統制したので
あつた。

(二) 豊似山道(幌泉より猿留に至る間)を云ふ。

トヨニ
豊似山道とは、幌泉より猿留に至る約八里の道路を云ふ
トヨニ
現今は幌泉の南一里弱歌別川右岸谿谷を東北方に廻り、追
分峠を越へ在田牧場を経て庶野に出て、それより海岸新道
を猿留に到る、若し新山道を通行せず、海に沿ふて襟裳岬
を迂回するとせば、甚しき迂路を通るので、歌別から海岸
を離れ、豊似山系を横断して庶野に出るの道を開いた譯だ、
庶野と猿留間、即ちニヨモイ以北の海岸は、名高い猿留の
險で、往來の困難言語に絶し、海面にも岩礁亂布して航行

も亦危険である。

東蝦夷地夜話と云ふ書に、

凡そ東部の道中、險惡の所多かれども、レブンゲの嶺を始め
として、シャマニの山道、サルルの沼見嶺を第一となす。冬
より春にかゝり、雪の積るころは、馬踏たちかねるが故、海
岸の百人濱へ出で通行す。こは至極の難所にして、いとも險
惡の所あり、山道はかの沼見嶺にして、いかにも高山に道を
拓き、嶮岨いふ計なし。

とある。寛政年間の舊徑は、歌別の上流より山の半腹を横
に走り、百人濱や庶野へ下らず、神湖の邊を通つて猿留川
に沿ふて猿留に出たのであつた。是れ庶野以北の海岸の難
所を避ける通路であつたが、近年に至り屢々變更修する
所あり、昔の山道は荒廢した所が多い。

トヨニスツブ
豊似嶺は、庶野の北西一里半、猿留の西一里半にある標
高九三五米の高峰で、其餘勢海に迫るもの即ち猿留海岸の
嶮屋と爲す。此山の北陰半腹に、神湖あり周廻二十町、海
抜一千尺の山間にて四面山を以て圍まれ、湖面碧澄藍色を
湛へてゐる、昔幌泉より猿留に通するには、庶野に下らず

山腹を横ぎり湖畔を往た、土人等湖畔を過ぐるまで、途中談話を禁じ且酒饌木幣を捧げて神靈に供したと云ふ。

松浦氏の紀行に『山の半腹の狭き道を行くに、左カムイ

トウ周廻一里と云ふ、其源知る者なく、水色如藍、山の懷に在る故、周圍高けれとも、其水増減なく、又流口もなく、摩周湖に同し、又水面一枚の落葉を泛ぶことなく、實に不思議の湖也、依て神湖と號し、往古此峠を通行の者、湖の見ゆる間は談話を禁じたり。』とある。

文化年間近藤重藏は此海岸の難所を避けるため、山道を開いたが、文政以後は荒廢してしまつた、安政年間に至り再び改修を加へて開通したと云ふ。

冬島より三十町を東南に進んだ所に、『岩負鼻』と云ふ岬角があるオヨイともいふ。念佛坂ルエランベの險は、此鼻の背後に在り、鼻の北西海岸にはテレケウンの險があり、東方にチコシキルの險あり、是等の險を避けて開鑿したのが、所謂様似の冬島山道である。

寛政十一年の未曾有記に、左の記事がある。

冬島は、元、冬島村と云ひ、平鶴の東隣に當る、様似川より約一里半の海岸にある。是より以東の海岸は、険峻を

ボロマンベツ（幌満別）より、右に行く時は、去月越へたりし高山の新道也、左へ行けば、山に傍ひて海中を行く、チコシキリといふ名高き難所あり、此難所を尋見んとて來りしに思ひ計りし引潮なり、時分はよしと、直に山巖の隅を過て見れば、一丈二丈の大岩、六つ七つ争ひたつ、其間を身をそはめて繞り行、風一聲起て打掛る波腰を過ぎ、岩に碎けて玉を

爲し、満面に灑かりて雪の飛かとあやまたる、右は重巖疊嶂

天を隱くし日を蔽ふ、洪濤激浪の爲に、山崩崩れ撞けて、危

岩怪石磊砢として、足を履むべき寸地もなく、三里斗も連り

たり。此の石の上を渡り行き艱苦いぶ斗なし、潮煙に前後を

忘じ、石皆鳴て鏘然たり、あるは、側に垂る懸崖の、頭の上

に落かゝるかと、跼て過ぎ、あるは、石角頭に礙する心地し

て、踏して去る、行くこと二里斗にして、大岩二つあり、(是

をテレケウシと云ふ)、二つの岩の頂上に、長さ四五尺の丸木

一本わたしたり、從者みな目を見合せて舌を吐く、かゝる處

なればこそ、あらかじめ覺悟せよとは云しそ、越すに越され

ぬ事やあるべきとて、手に手を取組、魚貫して這上る、岩の

下は、皆鯉樹の如き亂石なり、辛ふして向ふの岩に取付て下

らんとするには、此岩の下り口、殊に足懸りなき故、梯子寄か

けて、上り下りすと聞しが、波にさそはれて何地行けん、尤

も危き業也。徐につたひ下りて(瀧潮に、此岩越難ければ、

上の山に攀上る、念佛坂とて無双の難所也)、大難は凌ぎたれ

ど、猶前のごとく石頭を渡り、行くこと半里計にして、二の

亘岩屹として相對す、其間を馳抜けて盤石に坐して休足す。

こゝの高岬をフヨガシマ(冬島)と云ふ。又石下を歩むこと

半里にして砂道になり、又半里餘にしてシャマニ川を渡り、

山一つ越て、シャマニの舍りに着ぬ。

寛政十一年の赤山紀行には、左の如く詳錄してある。

シャヌベツ、石川也、夫より出島、海岸の高さ三丈餘、ブヨ

シユマも石川也、大岩六丈餘の高さあり、石川の傍を過てヲ

シユフシ次にユトニとも云ふ川あり、行事一里許、岩山危險

にして、大石濱に碎落て通道なし、岩角の上を傳へ通る、テ

レケウシの難所也、岩壁四五丈餘海に出たり、あたかも蟻の

樹上を行が如く、岩に這上るに脆くして甚碎け易し、頂上は

剣刃の如く、下り路尙危し、所々怒濤打入て、岩に少しの洞

あり、此處にて波の差引を待て、渚を走通る如レ此處之度也、

夫より大岩の鼻を廻る、又前の如く、危く其岩を越て、石濱

より出崎を過れば、海中に大なる離岩あり、高四丈許、傍の

石山をヲホイノホリと云ふ、岸を離れし岩山に洞あり、風景

相州江の島の岩屋に似たり、洞深さ六七間、中に入て見る

に、岩山畫雜石にて見るに足らず、瀧あり高十丈餘、瀧の傍

四尺許の洞二あり、三町餘行て二洞あり、又夷人ホロといふ

亘岩、高さ五六丈、其上に二丈許の石、人の立たる形に似た

り、左の岬上に瀧落る、其口三計にてハ、中程に水風にちり霧

の如し、近藤重藏來り見て、此岩を李白岩と名つけたり、岩

上に札あり、瀧江子仙人岩と名づくと。チコシキリは出鼻に

て、切立たる岩の裾に浪の寄たる故に、わつかなる岩間を蟹の如く横傳に這渡る、此間二十間許、又十町除行、突立たる岩を越行、浪高き時は道なし、浪の少き時は岩傳にて行、此日浪荒き故、二丁計戻り、屏風の如き切立たる山を上の事三丁餘、熊笹等分て四五丁行、念佛坂に出づ、坂中頃より絶壁にて草木なし、下ればボロベツ也、厚岸路中の嶮、此坂第一也。

安政年間の松浦氏紀行に、

ヲソフケウシ(駄牛)、此邊小石濱なり、是より山へ懸る、往昔は潮干を見て海岸を通りし故、風波あれば幾日となく往来の絶たりしが、文化十成年、近藤守重新道を開き、一株の碑をも立置く、然るを松前家へ復されしや、其碑を取捨たりと、實に遺憾ならずや、拓本一枚を得、

このみちは、はまだおり、テレケウシならびにテコシキリとうのなんじよありて、わうらいのものなんぎすべきによりて、このたびあらたにきりひらきたるあいだ、このみちわうらいのもの、ひとゑだの木、一本のさゝなりと、きりすかして、ながくわうらいのをめを、こゝろがくべきものなり。

如此平假名にて誌す、守重の見識感すべし。惣て往來等の事

は、かうありたきものなり。然るに其事を土人に話したれば、守重「ニシバ」の石、和人字にて立しが故に、松前領に成たりと捨たり、是を土人字にて書て建置れなば、松前領に成たりとて、取捨られはせじと云、其土人字とは何ぞと問ひしに、片假名の事なる由、其故は、今に土人の名前、また村名等、皆片假名もてしるせばなり。

續大八洲遊記(原漢文)に、冬島の險に關する記事があ

る、因て之を和譯して左に掲載する。

様似驛、浦河を距る三里半、四五十戸あり、此地は北地有名の險路と爲す、驛を出て様似川を渡る、一石山あり、海濱に突出す、攀て其の背に上る、危礁無數、海中に聳ゆ、激浪奔注し、雷轟き雲を噴く、其左は則ち懸崖、灣環して其餘勢を助くるに似たり、最も壯觀と爲す、十餘町、冬島村海岸に亘り、其中に洞穴あり門の如し、潮汐往來して頗る奇なり又二巨巖あり並び立つ、亂石堆累す、之を踏んで行く、又行く十町、石山海を壓して起伏す、高さ率ね二十餘丈、洪濤山脚を打ち、迫り近くべからず、近年山脚を鏟削して、蹊徑を作る、崎嶇折轉路初て通す、崖懸り徑し難きは、即ち隧道を爲す、以て之を通ずるもの凡三、下瞰すれば則ち危礁怪巖、撲突排別す、潮汐之が爲に遮らる、怒濤噴薄、極力盪擊す、

龍矯び虹飛ぶ、仰げば則ち巨巖巍然、下り墮んと欲するもの

徑々之れあり、極て壯觀を爲す、此の如きもの里餘にして盡きず、眞に北地の絶景と爲す、然れども石芒峻稜、少しく注意せざれば、則ち跌と足を傷む、絶景ありと雖も、目流望に暇あらず、緩歩も猶顛仆を恐る、然れども土人馬に跨て上下す、眞に性命を惜まざる者、時に晚汐稍至る、汐の爲に迫られ、奔て洞に入て之を避く、尙ほ沾濕を免れず、若し海路に出でず、而して山道を取れば、迂にして遠きこと一里餘。

右大八洲遊記を讀み、安政の頃海岸の山脚を削りて小徑を作り、懸崖の所には隧道を穿つこと二箇所、以て往來の便を開いたのであることを知られる。

維新の初め、冬島と幌満との間に、群内・嘔牛・小宵の

三村が置かれたことがある。今、冬島に接してライクンナイトと云ふ所あり、元、嘔牛村の在りし地、其東にオシキウシと云ふあり、元、郡内村の在りし地、尙南約半里に、

オユオイと云ふあり、元、小宵村の在し地、以上三村は、明治十五年悉く冬島村に合併せられた。嘔牛は様似山道の

険崖の西端にして、此所より山を登り、テレケウシ・コト

ニ・チコシキルべを經て、ワンシノナイに通する。

記者は近藤守重の平假名新道碑を讀み、感銘措く能はざるものがある、それは、往來の者難儀するにより、新に切り開いたと曰ひ、此道往來の者は樹枝一本簾竹一竿なりとも切りすかし、永く往來の爲を心掛くべしと勸告されたことである、是れ往來人の遵守すべき千古不磨の言にして、所謂る道路愛護精神の發露と謂はねばならない。現今の人々も亦飽まで此精神を尊重し實行して貰ひたいものである。此稿の結末に於て一言記者の希望を述べ置く。(了)